

研究テーマ	児童の思いを形作るための指導の工夫 —第 6 学年「卒業メッセージカード 窓のむこうは…」の実践を通して—
-------	--

つくば市立大曾根小学校 教諭 小口 あや

## I 研究テーマについて

小学校学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）図画工作科編の教科の目標には、「図画工作科の学習は、児童が感じたことや想像したことなどを造形的に表す表現と、作品などからそのよさや美しさなどを感じ取り見方を深める鑑賞の二つの活動によって行われる。」とある。造形活動とは、感じたことや想像したことといった目に見えないものを作品という目に見えるものにする事だと考える。目に見えないものを目に見えるものにするために、児童は、自分が感じたことや想像したことをどのように表現するか考える。

しかし、全ての児童がどのように表現するかを簡単に考えることができるわけではない。自分が感じたことや想像したことをどうやって目に見える形にすればよいのか。「そもそも感じたことや想像したことがない。」といった理由から、制作にとまどいを感じる児童は少なからずいる。特に高学年になるほどその傾向は大きい。

一方で、多くの児童はそういった状況を何とか乗り越え、感じたことや想像したことを視覚化された物として作品をつくりあげる。もちろん作品の出来の満足度は児童によって異なる。それでも、求められたテーマの作品をつくりあげる。当初、制作にとまどいを感じていた児童にとって、何が助けとなったのか。これらを明らかにすることは、児童の製作活動を支援する上で有用であると考えられる。

この研究では、児童が制作を通して、自分の思いをどのように表現していくのかを観察し、どのような支援を行うとよいかを考察する。この研究をもとに、今後のよりよい造形活動の指導に生かしていきたい。

## II 研究の実際

## 1 題材名 卒業メッセージカード 窓のむこうは…

## 2 題材の目標

自分の思いを表すのにふさわしい色や形やそれらの組み合わせを考えながら元々もっていたイメージをさらに広げ、自分の表したいことをよりよく表現する。

## 3 題材について

## (1) 児童の実態（第 6 学年 調査人数 84 人 2015 年 1 月調査）

	質 問	回答（複数回答）	人数
1	前回の製作では、何を描けばよいのかすぐに思いつき、最後まで止まることなく描くことができましたか。	① 最初から最後まですらすらと描けた。	6 人
		② 描き始めるまでに少し時間が必要だった。	71 人
		③ 描き始めるまでにすごく時間が必要だった。	7 人
		④ (②③を選んだ児童で)途中で何を描いたらよいのかについても分からず困った。	38 人
2	1の質問で、②③④を選んだ人に聞きます。なぜすらすらと描けなかったのですか。	① 何を描けばよいのか思いつかなかったから。（発想）	33 人
		② どのように描けばよいのかがわからなかったから。（構想）	56 人
		③ その他…「上手く描けなかったから。」「絵のバランスがわからなかった。」「どの思い出を描くかまよったから。」「絵の配置を決めるのに時間がかかったから。」	4 人

3	2を答えてくれた人に聞きます。あなたは困りながらも作品を仕上げることができました。問題をどうやって乗り越えたのですか。	① を回答した児童 (33人)	
		(1) 友達の作品を見て参考にした。	21人
		(2) 一人で考えているうちに思いついた。	23人
		(3) 写真を使った。	1人
		(4) 一つ描いたらもう一つ思いついていった。	16人
		(5) その他・・・「先生のアイデアなど」	3人
		② を回答した児童 (56人)	
		(1) 友達の作品を見て参考にした。	24人
		(2) 一人で考えているうちに思いついた。	27人
		(3) 写真を使った。	2人
		(4) 一つ描いたらもう一つ思いついていった。	21人
		(5) その他・・・「てきとうに描いた」	4人
		「先生に相談した」「友達に教えてもらった」「先生にアドバイスをもらいながらかいた」	
		③ を回答した児童 (4人)	
		(1) 友達の作品を見て参考にした。	4人
		(2) 一人で考えているうちに思いついた。	2人
		(3) 写真を使った。	1人
		(4) 一つ描いたらもう一つ思いついていった。	2人
		(5) その他	1人

上のアンケート結果は、本実践の直前に行った実践「思い出のランドセル」を振り返って回答されたものである。この実践は、6年間使ったランドセルと6年間の思い出を描いたものである。アンケートを行った目的は、思い出という目の前には既にあるものを描く課題に児童がどのように取り組んだかを調査するためである。

思い出を描くためには、「どんな思い出を描くか」という発想と「どのように描くか」という構想が必要である。アンケート結果からは、最初から最後まで次に何を描くべきか迷うことなく製作に取り組めた児童はわずかであることが分かる。ほとんどの児童は、発想することにも、それ以上に構想することにもある程度の時間をかけている。他からの力も借りながら、児童は発想・構想を行い、作品を仕上げたことが分かる。

## (2) 題材観

本題材で出来た作品は、児童が卒業式で保護者に渡す。最終的には見開きB5サイズのカードとなる。基本は、児童から保護者に対する手紙である。手紙の内容にふさわしい6年間の思い出や今後の夢、保護者に対する感謝など、児童の思いを主題とし、絵に表す題材である。卒業式に保護者に渡す手紙としてふさわしい主題・表現方法などを考える。カードは二重構造になっており、上のカードは窓の形に切り込みを入れ、窓を開くと下のカードに描かれた絵が見られる。自分の選んだ主題を相手に伝わるように表現するには、「どのような形の窓にすればよいか。」「窓の向こうに何があればよいか。」なども考える。そのため、発想や構想の力をつけるのに適している。

一方、この題材は、卒業まであと3ヶ月という時期に始めるため、児童によっては、卒業はまだ先のこととして、卒業に対してどのような思いをもてばよいのか分からない児童も少なくない。児童が卒業をど

う表現するのか考えながら取り組むこの題材は、児童の卒業に対する思いを形づくっていくものでもある。

また、今回の題材は、自分の思いを表現することを第一の目標とする。よって、児童は、自分が最も扱いやすい画材や材料で表現することができるように、画材や材料の指定は特に行わない。

### (3) 指導観

児童の実態により、児童の何人かがアイデアスケッチの段階で行き詰まってしまうことは予想できた。そこで、発想や構想をするための助けをあらかじめ用意しておいた。もちろん最初から助けを提案したわけではない。児童が考える時間を十分確保した上で提案するようにした。

調査から、何人かの児童は発想や構想することに戸惑いを感じつつも、友達の作品を参考にしたり何かを描いたりしたものから次に表すものを考えついていることが分かる。このことから、児童は、何らかの形や色を基に連想しながら発想や構想を行うのではないかと考えた。そこで、児童の発想・構想の基になるであろうものを用意することにした。

## 4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
自分の表したいことを見つけ、それに合う材料・画材・色・形を選ぼうとする。	自分の思いを基にしたリ、材料・画材・色・形から発想したり構想したりして、自分の表したいイメージを広げることができる。	用具を正しく使ったり、材料・色・形の特徴をつかんで組み合わせや表し方を工夫したりするなどして、自分の思いを表すことができる。	友達の表し方の違いやよさに気付き、感じたことを伝え合うことができる。

## 5 指導と評価の計画（10時間扱い）

時間	学習内容・活動	評価規準・【評価方法】
第1次 ①	<ul style="list-style-type: none"> <li>卒業式で保護者に渡すカードにふさわしい主題を考える。</li> <li>アイデアスケッチをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の表したいことを見つけ、それをどのように表すか考えている。 <b>関</b>【観察・ワークシート】</li> <li>自分の表したいことをどのように表すか考えている。 <b>想</b>【観察・アイデアスケッチ】</li> </ul>
第2次 ⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>アイデアスケッチを基に、鉛筆で下がきをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>材料や画材などの特徴、自分の思いなどを基に、自分の表したいことをよりよく表す色や形を考えながらつくっている。 <b>想</b>【観察・作品】</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>下がきしたものに色をつけていく。(画材等表現方法は自由)</li> <li>窓をカッターで切り、窓の裏にあたる部分にも絵を描いたり色をつけたりする。</li> <li>2枚のカードを貼り合わせ、組み立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>材料や画材の特徴などを生かし、自分の思いを表している。 <b>想</b>【観察・作品】</li> </ul>

第3次 ①	・友達の作品を鑑賞し合う。	・表し方の違いに気付き、感じたことを伝え合っている。鑑【観察・ワークシート】
----------	---------------	--

## 6 指導の実際

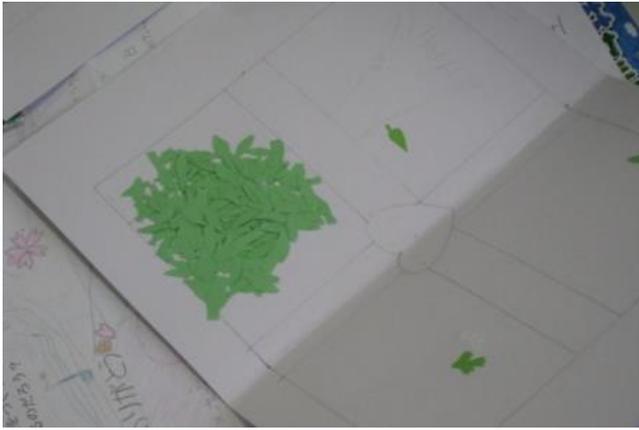
### (1) 第1次

まずは、児童に参考作品を見せながら、「卒業式に保護者に渡すカードをつくります。」と伝えた。続けて、「カードは卒業式の日朝、式場の保護者の座る椅子に置いておきます。保護者は、卒業式が始まる前、静かな音楽が流れている会場でカードを開けて見ます。」と伝えた。児童は卒業式に4年生から出ており、式の雰囲気はよく分かっている。教師から当日の厳かな様子を話すことで、どんな感じのものをつくれればよいのか方向性を示した。

その後、主題を考えた。主題を考えるときには友達と相談してもよいことにした。自分の思いを言葉にすることで、自分が表現したい主題を見つけやすくなると考えたからである。主題を決めた後、主題を伝えられるような作品にすることを確認し、アイデアスケッチに取り組んだ。アイデアスケッチは、なかなか進まない児童もいた。ずっと考えても何もイメージが浮かばないという児童には、とりあえず手を動かして適当な模様をつくることや他の児童の作品を参考にすることを提案した。

### (2) 第2次

第1次に行った支援でも何も思い浮かばない児童もいた。そういった児童にはアイデアスケッチをやめさせ、すぐに画用紙に描くことを勧めた。いつまでも同じ所にとどまっていたら、制作意欲が下がると判断したからである。アイデアスケッチを描き込みすぎている児童にも、すぐに画用紙に鉛筆で下書きをするように指導した。アイデアスケッチで表現しつくしてしまっただけでは、本末転倒であるためである。何も思い浮かばない児童には、画用紙に「①はばたくイメージである「鳥」やお礼のイメージである「花」を描いてみる。」「②好きな色の色紙を持ってきて切ったものを画用紙の上に置く。」「③コンパスや定規を使って模様を描く。」ことを提案した。児童は、①②③の提案で画用紙の上に表現したものから他に様々なものを発想していった。発想して表された色や形は、それぞれの児童ごとに異なり、結果として独自のものになった。①の提案により鳥や花を表現した児童は何人もいたが、児童ごとに色や形が異なった。どんな鳥か、どんな花かは児童が独自に考えていった。鳥や花の周りの様子はそれぞれの児童がそれぞれに考えていった。また、②では、色画用紙の色を基に児童は発想していった。例えば薄いピンクの色画用紙を持っていった児童は桜の花を、黄緑の色画用紙を持って行った児童は風にそよぐ葉を連想して表現した（資料1）。そうやって表した桜やタンポポを基に、さらに様々なものを連想して構想し、表現を広げていった。それでも何も発想できない児童には、③の方法を勧めた。コンパスで円の模様を描き、「卒業式にふさわしい色の組み合わせで塗るように」と指導した。また、教室にある画集や本の挿絵などを参考にしている児童もいた（資料2）。また、製作途中で友達の作品を見て回る時間を設けるなどして、様々なアイデアを吸収することができるようにした。花や鳥など、表現した内容は同じでも、作業を進めるごとに児童の作品は児童独自のものになっていき、最終的に同じような感じを受ける作品はなかった。自分の思いが表れた作品を、児童は丁寧に色をぬったり（資料3）、折り紙を貼ったりしていた。完成した作品が資料4である。



資料1 色からの発想・構想



資料2 画集を参考にする児童



資料3 色を丁寧にぬる児童



資料4 完成した作品

(3) 第3次

作品ができあがり、学級で鑑賞会を開いた。鑑賞会の前に、自分の作品の「①テーマ・思い」「②工夫点」をワークシートに書き込んだ。主題がはっきりしないまま制作に取り組んだ児童であっても、「①作品のテーマ・思い」を迷うことなく書いていた。作品をつくることで主題も形づくっていったと考えられる。また、鑑賞会では、そのワークシートに感想を児童同士で書き合った(資料5)。自分の作品に対して友達からコメントをもらえることによって、作品に付加価値がつけられるようにすることがねらいであった。



資料5 感想を書く児童

III 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 発想・構想をする上で役立つ指導

	発想・構想の基になるもの	発想・構想をする上で役に立ったと答えた児童数 (児童数 112 人・制作後のアンケートより・複数回答)
①	「鳥」や「花」のイメージ	63
②	友達の商品	51

③	卒業式の雰囲気を出す	43
④	友達との話し合い	43
⑤	友達との何気ない会話	43
⑥	定規やコンパスで描いた模様	29
⑦	自分が最初に表したもの	24
⑧	色画用紙の色	21
⑨	参考作品	18
⑩	色画用紙を切ってつくった紙	12
⑪	画集や本の挿絵	11
⑫	その他	9「六年間の思い出の品」「教室に飾ってあった花」「先生からのアドバイス」「色々な考えを組み合わせた」「大好きな生き物」「自分のかきたいイメージ」「なんとなく描いた模様がとてもよかった」「今まで読んできた漫画の絵」「自分の気持ち」「一年の思い出」

製作後のアンケートから、どんな時に使う物なのかという導入時のイメージは、作品にふさわしい色や形などを考えるのに役だったようである(③)。また、②④⑥から、児童は友達と話し合ったことや友達の作品を基に発想したり構想したりすることがわかった。製作中に友達と作品について話したり、友達の作品を見て回ったりする時間をとったことは有効であったと言える。また、多くの児童が苦手としたのは、何を表現するかという発想の部分であった。お礼や旅立ちにありがちな「花」や「鳥」のイメージを例として提示した。この提示は作品作りの上で役に立ったと答えた児童が最も多かった(①)。最終的に、何人もの児童が鳥や花で自分の主題を表現することになった。しかし、できあがった作品は全て異なる印象を受ける物であった。同じ物をイメージしても、作品という形にする中でそれぞれの児童独自の形や色の組み合わせになっていき、その児童ならではの作品になることがわかった。また、特に決まった形や色でなくても、偶然できた形や何となく選んだ色から発想し(⑧⑨⑩)、作品にしていく児童もいた。何らかの形や色からですら、発想していくことができることがわかった。学習前のアンケートでは、構想の活動に困難を感じる児童が最も多かった。しかし、今回の学習では紙の上に表したもののから、児童は構想して広げていった。

## (2) 考察

児童の内面では感じたことや想像したことと向き合い、様々な面から、あるいはより深くとらえ直す活動が行われたのではないかと考えられる。児童が製作当初に持っていた感じたことや想像したことは、造形活動を行うことで、より明確になったり細やかになったりして、洗練されていったのではないだろうか。

## 2 課題

今回の学習では、一つのイメージを深め、広げていく構想する活動は、児童はとても熱心にやっていた。児童にとって難しかったのは、自分の主題を何で表現するのかという発想の部分であった。少なくない児童が教師が例として提示した、花や鳥のようなあらかじめ決まっているイメージを発展させて、自分なりの作品に仕上げていた。教師が出した例をそのまますぐに使うといったやり方ではない、児童が自分達で発想したと思えるような支援方法を考えることが今後の課題である。

## 【引用文献】

『小学校学習指導要領解説図画工作科編』(平成20年8月)